



タイトル	外来種は本当に悪者か？ 新しい野生 THE NEW WILD
原 題	Why invasive species will be nature's salvation
著 者	Fred Pearce フレッド・ピアス
訳 者	ふじい る み 藤井 留美
解 説	きし ゆうじ 岸 由二
出 版 社	草思社
発 売 日	2016年7月20日
ページ数	320頁

本書で扱われているのは、自然回復論である。すなわち、外来種をどう理解し、評価するか、未来の自然保護をどのように考えるかを著者は判りやすくまとめている。

6つの大陸で外来種の足跡をたどって判ったのは、外来種を悪魔扱いする根底には、変化への恐怖心があるからだ。野生生物を愛する人ほど、外来種には敵意をむき出しにする。

自分の土地に固有なもの、身近で親しみのあるものに愛着を抱いたり、人間の手が加わる前の自然に思いをはせるのは理解できるが、それが異質なもの、見知らぬものへの恐怖や憎悪に直結してしまう。

根拠の薄い時代遅れの自然観も、外来種嫌いを助長する。熱帯雨林、湿地、サンゴ礁といった地球上の生態系は、完成された不変のもので、生物は其中で独自の役割を果たしている。だから外来種はその調和を乱す邪悪な存在でしかない——そんな自然観は一体どこから生まれるのだろうか？

少なくともダーウィンでないことは確かだ。自然選択によって種は適応し、生存していくと考えたダーウィンだが、生態系はそれぞれ我が道を行く種がごちゃまぜに集まっているだけで、完全な状態に進化するとは一言も述べていない。

自然は安定した完全なものだとする考えは、生態学でも少数派になりつつある。むしろ自然は行き当たるばったりなもので、今の状態がずっと続くわけではなく、火災や洪水、

病気といった要因で絶えず姿を変えている。当然種の入替わりはあるし、新しい種が適応することもあれば、既存の種が居場所を失うこともある。変化があつて当たり前なのである。……………。

さて、目次を見てみよう。

はじめに

## 第1部 異邦人の帝国

- 第1章 グリーンマウンテンにて
- 第2章 新しい世界
- 第3章 クラゲの海
- 第4章 ようこそアメリカへ
- 第5章 イギリス——イタドリにしばられた国

## 第2部 神話とドラゴン

- 第6章 生態学的浄化
- 第7章 よそ者神話
- 第8章 “手つかずの自然” という神話
- 第9章 エデンの園の排外主義

## 第3部 ニュー・ワイルド

- 第10章 新しい生態系
- 第11章 都市の荒廃地で自然保護を再起動する
- 第12章 ニュー・ワイルドの叫び声

解説 岸由二

著者は、まず大きな話題になった外来種の侵略について、その裏側にある事実を探っていく。

第1部は5章からなり、「島」が舞台である。人間が持ち込んだ動植物が、不毛の島に健全やかな生態系を築き上げた話もあれば、対照的に導入種が海鳥の営巣地を荒らしまくった話もある。これほどドラマチックではなく、判断が微妙に分かれる例も紹介している。

いずれにしても、外来種は有害な侵略者というより、実際は人間のせいで荒廃した生態系にうまく入り込んだだけだということが判る……………。

第2部は4章からなり、外来種の影響や、環境保護の方法に対する私たちの考え違いが、滑稽な結果を生み出している現状を見ていく。民族浄化ならぬ「外来種浄化」の試みが成功した例があまりないのは、外来種や生態系、自然の仕組みに関する誤った神話から出発しているからではないか？ そうした神話を粉碎し、新しい解決策を見つける時が来ている

と著者は言う。

第3部は3章からなり、私たちの自然観を再起動しようと著者は言う。いまや地球上のほとんどの場所で、在来種と外来種が新たな組み合わせを作り、共存共栄しながら生態系を維持し、疲弊した自然に活力を与え、私たちの暮らしまで豊かにしている。

自然を活かすためには、保護のやり方も再起動する必要がある。異質なもの、見慣れないものを恐れるのはもうやめよう。敗色濃厚な在来種にばかり肩入れせず、勝者も後押しすべきである。これからは、勝者の力を借りながら新しい自然を再構成していくしかないのだから。……。

ちょっと意外な感じの外来種（植物）の記述があったので紹介しておこう。

第5章 「イギリス — イタドリにしばられた国」である。



イタドリ（虎杖、痛取）とは、タデ科の多年生植物で、日本ではどこでも見ることが出来る。茎を折ると「ポコッ」と音が鳴り、食べると酸味があるが、おやつのない評者の子供時代にはよく折って食べたものである。茎は中空で多数の節があり、その構造はやや竹に似ている。三角状の葉を交互につけ、特に若いうちは葉に赤い斑紋が出る。

秋に熟す種子には3枚の翼があり、風によって散布される。そして春に芽吹いた種子は地下茎を伸ばし、群落を形成して一気に生長する。路傍や荒地までさまざまな場所に生育でき、肥沃な土地では高さ2メートルほどまでになる。やや湿ったところを好み、また、攪乱（かくらん）を受けた場所によく出現する先駆植物である。谷間の崖崩れ跡などはよく集まって繁茂している。

**世界の侵略的外来種ワースト100 (IUCN, 2000) 選定種の一つ**である。19世紀に観賞用としてイギリスに輸出され、旺盛な繁殖力から在来種の植生を脅かす外来種となり、コンクリートやアスファルトを突き破るなどの被害が出ている。この種の被害は、日本でも交通量の少ない場所でよく見られる。

おもちゃのない時代には、子供の遊びとして、イタドリ水車があった。切り取った茎の両端に切り込みを入れてしばらく水に晒しておく、「たこさんウィンナー」のように外側に反る。中空の茎に木の枝や割り箸を入れて両端を支えておいて流水に置くと、水車のようにくるくる回る。

また、一面に花が咲いていると、多くの小型の昆虫たちが集まる。秋には昆虫が集まる花の代表的なものである。

イギリス人は、故国の動植物を植民地に持ち込み、反対に各地の珍しい動植物を故国に持ち帰っている。園芸愛好者が多いイギリスでとりわけ目の敵にされているのが、日本の火山の斜面に多く自生していて、観賞用に輸入されたのがイタドリである。

イタドリがスウォンジー（ウェールズ南部）に入ってきたのは1918年である。イタドリが庭に生えて困ると住民が言い出したのは1970年からである。イタドリが急に暴れだしたのは理由がある。スウォンジーは長い間、銅産業で世界を牽引していた。だが、銅生産が衰退していき、産業廃棄物の一大集積地へと変貌していく。有毒金属に強いイタドリは、

こうした荒廢地にも好んで生える。その後、スウォンジーではヨーロッパ最大規模の都市改造が敢行され、イタドリの根茎が混じった大量の土砂があちこちに運ばれた。これでイタドリの定着と蔓延は決定的になった。

イタドリをヨーロッパに持ち込んだのは、日本人にはおなじみのドイツの医師シーボルトである。イタドリは勢いが良すぎると抜かれて処分されるが、空間と日光さえあれば根付くので、ごみ捨て場、線路、墓地と場所を選ばず生えていった。20世紀に入るところにはロンドンでも見られるようになり、1960年代には、荒涼としたヘブリディーズ諸島にも定着していた。

イタドリは、住宅の基礎部分を突き破り、居間にまで進出するので、テレビニュースでも取り上げられ、決まって白衣姿の科学者が登場し、イタドリは邪悪な植物だとカメラの前で語った。

だが、イタドリはそんなに悪質なのだろうか。イギリスの環境庁は、イタドリを「イギリスで最も攻撃的、破壊的、侵略的な植物」と位置づけし、「生態系を損ない、その構成を変化させて、生物多様性を低下させる」と断定している。

地面を覆いつくすイタドリは犯罪者である。イタドリが引き起こす年間の損失額は2億5千万ドルと政府は試算する。—— 国民一人当たりではビール1パイント（約600cc）ほどである。大した金額ではない。

環境庁がイタドリ駆除に割いている予算は年間300万ドル。スウォンジー市は5万ドルもかけていない。調べてみると、2億5千万ドルという数字は、国際農業生物科学センター（CABI）が出所であることが分かった。

スウォンジーでは建物を建てる時に、その土地にイタドリが生えていないことを確認し、もし生えていたら適切に駆除しないと市の建設許可が下りないという。そんな町はイギリスの中でもスウォンジーだけだ。ただし、イタドリ対策が実際に必要になるのは、建築申請全体のわずか2.25%である。1件あたりの対策費用はおよそ8000ドル。イギリス全体で1年間に出される建築申請は、平均して56万8千件。

容認出来ないのは、ここから先の計算である。以下、その費用を見てみよう。

CABIはスウォンジーでイタドリ対策が実施される建築申請の割合を、そのまま全国に当てはめている。56万8千件の2.26%だから、1万2800件（ $56.8 \times 0.0226 = 1.28$ ）。さらにCABIは法的費用やその他色々を含めて、対策費用を2倍に増している。

結局対策費用は2億2千万ドル。これに川岸や道路、鉄道線路での駆除費用や、不動産の価値減少分を足して2億5千万ドルということになった。……。

「外来種は何であれ排除せよ、より古くから固有と認定される在来種こそ保全されるべきである」という常識的な自然保護論は、現代生態学の領域ではすでに四方から批判され、吟味されるべき、過去の命題となっている。

筆者は、

- ・外来種だけで見事な安定性を示す生態系が実在する。
- ・外来種の介入があればこそ豊かな生物多様性・生体機能を発揮する在来・外来生物の混合生態系（著者が主張する NEW WILD=新しい野生）が存在する。
- ・特定の外来種が生態系攪乱・破壊の元凶とされる様々な事例において外来種は実は犯人ではなく、人間による汚染などの環境破壊に局所・局所的に対応しただけの存在である。ことなどを、「これでもか、これでもか」という執拗さで事例を挙げて解説している。

今、目の前で「手付かずの自然」と見える生物群集を構成している種は、長大な進化の歴史をその場所で共有し、共進化してきた存在ではなく、もしかしたら、さほど遠くない過去において、自然の様々な偶然、あるいは人為によってその場所に到着した、外来種同志かもしれない。…………。

本書は、専門家によるアカデミックな書ではなく、ジャーナリストによる啓蒙書である。中世的とも呼ばれる日本の生態理解のもとで自然保護を論ずれば、守るべき価値のある種は、在来種であり、外来種は何であれ忌避<sup>きひ</sup>されるべき存在、回復されるべき自然は、本来その場に歴史的進化史的に共存すべき在来種の作り上げる生物群集で、外来種は除去・拒否すべきであるという実践指針が生まれてしまうのは、理の当然であったと言う他ない。

同じメダカでも、地域固有であることが遺伝子分析で推定されるものは絶滅危惧種だが、ペットショップ由来のメダカは、除去・排除の存在でしかないというような、我が国の自然保護の現場の理解も、実はそんな中世的な生態理解の産物だと言っても多分誤りではないだろう。

2016.9.3